

序

理学療法士は、患者の身体に、手を触れることで、身体内部の情報を感知し、その指先で身体の状態を整えます。これを毎日、当たり前のようにはやっていますが、薬も注射も使わずに治すとは、凄いことではないでしょうか？そして、患者を治せたときの喜びと、治せなかったときの悔しさを知り、さらなる努力を心に誓います。『いつか、ゴッドハンドとよばれるようになりたい』『あの先生だったら、もっと治してあげられるのではないか？』『あんなに自信をもって治せたら、もっとこの人生が豊かになるに違いない』そんなことを思いながら、僕は理学療法士としてのキャリアをスタートしました。

いろいろな実技講習会に参加した時、基本となる触れる技術とその基盤にある解剖学の知識が、効率のよいスキルアップを助けてくれました。エビデンスが蓄積され、多くのことがわかってきたとしても、手で治す理学療法士にとって、繊細な指先の感覚の重要性は変わらないと思っています。近年の超音波エコーを用いた運動器疾患の診療は、これまで盲目的に行われてきた診療を可視化し、理学療法技術も可視化できはじめています。このような技術革新は、自分達の触れる技術の高さを示すと伴に未熟さに対する気づきも促すことになり、ますます触れる技術に対する重要性を高めていると感じています。

この重要な触診技術は、理学療法教育のなかで十分に教育されているでしょうか？私は本書の筆者の森田竜治先生とともに学生時代に林典雄先生に触診を教えてもらいました。林先生の繊細かつ柔らかな手の使い方や少しも真似しようと、林先生に確認してもらっては、自分でも手の使い方を確認するという作業を1年間続けました。また40人に対して、5～6名の教員の先生がアシスタントで入ってくれるというたいへん恵まれた環境でした。このような教育環境のおかげで、実習はもちろん、臨床に出てからも触診に困ることは少なかったです。そこで、私もあんな素晴らしい環境をつくって触診技術を指導していきたいと思って、講義に望んでいますが、環境を整えることすら難しいという現実と直面しています。1人で大人数を相手にしても、15回の講義時間内で必要なスキルを効率よく伝えたい。そんなことを考えながら、毎年毎年講義をリニューアルして10年以上経ちました。

そもそも、

必要なスキルってどんなものなんだろう？

学生や新人はどうやったら、効果的に予習・復習できるんだろう？

そんなことを考えながら、本書の執筆をはじめました。触診技術の正確性の検証にはエコーを使い、なぜ触れなくてはいけないか？を考えようとして、必要とされる触診技術を検証して、豊富な動画で何度でも予習・復習できるようにしました。あとは、本を見ながら、触り合い、教員や先輩に触れてもらって、教室やリハ室が活発になっていくことを期待しています。

どんなに知識があっても、触らなければ、治せません。理学療法を生業とするもの、しようとするものにとって、不可欠な技術の向上に本書が少しでも役に立てれば幸いです。

本書は私が2012年から始めている形態学と運動学に基づく理学療法研究会の仲間で執筆をしました。また、株式会社羊土社の鈴木美奈子さん、大家有紀子さんには企画から編集に至るすべての面で多大なるサポートをいただきました。深く感謝します。

また、遊びたい気持ちを抑えて、笑顔で迎えてくれる圭一郎と蒼土、2人の子どもたちの子育てを引き受けてくれる妻 美知に感謝を込めて。

2019年2月

森ノ宮医療大学保健医療学部理学療法学科
工藤慎太郎